ドッポたち 小鳥音なかいこいはみよしひろ

JUNIOR PRESS ジュニアプレス

ウクライナ侵略1年

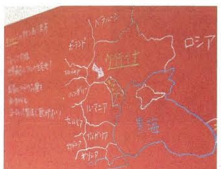
避難民雇い「現地料理」の店

ロシアによるウクライナ侵略が始まって約1年。戦争の終わりが見えない中、ウクライナから日本に避難してきた人々をスタッフとして雇用している東京都港区のウクライナ料理店「スマチノーゴ」が話題になっています。昨年9月に店をオープンした理由や避難民の方の思いを、日本人オーナーのTAKANEさんに取材しました。

「スマチノーゴ」でTAKANEさん（右から2人目）から、キーウ風カツレツ丼（手前右）やウクライナ風お肉のロールキャベツ（奥）など、料理の説明を受けるジュニア記者たち（撮影のためマスクを外しています）＝黒瀬祐生撮影

オフィス街に出店

オフィス街のビルの2階にある店に入った瞬間、大きな窓から光が入る明るい雰囲気に包まれるようでした。青と黄色、白の丸カラーの赤色でデザインされています。カウンターにかけられた千羽鶴は、イベントに料理を提供したお礼にウクライナ大使館からもらったものだそうです。TAKANEさんは、「家族や親しい人を残し戦火を逃れてきた避難民の人たちが、少しでも明るい気持ちになれるような空間を作りたいと考えました」と話します。俳優やデザイナーの仕事をしてきたTAKANEさんは、昨年3月にロシアの侵略が始まってウクライナ避難民の方を気の毒に思い、最初は寄付をしていました。そして、3月に日本政府が避難民の受け入れを決めると、「生活を安定させるには雇用の場が必要だろう。日本語が話せない人でもできて、人と触れ合えるレストランの仕事をしてもらうのがいいのではとお店の開店を考えました。



メニューボードにはウクライナ周辺の地図も描かれていた

京都の創業料理店の料理人の協力を得て、日本人の舌にも合うようにと、ウクライナの伝統的なスープ、ボルシチをカツオだしで作るなど和食の要素を取り入れたメニューを開発しました。「私たちも味見をさせてもらいましたが、中にお米の入った伝統料理のウクライナ風ロールキャベツは、もちもちのお米が合い、胸もしっくりくるおいしかったです。

TAKANEさん（右から4人目）に取材するジュニア記者たち

スタッフには7人

現在のお店の避難民のスタッフは、20～60歳代の7人うち女性が6人です。TAKANEさんがジュニア記者の質問を基に聞き取りしてくれたのですが、避難民の人たちは、日本の交通網の発達や街中の清潔さに便利さを感じる一方で、日本語ができないことには困っています。子供と一緒に避難してきた人は、子供たちが一番苦労していると心配しています。午前中は日本語学校へ、午後は日本の公立学校へ、夕方からはオンラインでウクライナの授業を受ける生活を続けていて、遊ぶ時間もないそうです。また、お店の料理は、「みんな愛を込めて作っている」とのことでした。

お客さんが励みに

近くの新橋や虎ノ門で働く人たち以外にも、遠方から来たり、ウクライナ語を勉強して来たりしてくれるお客さんもいて、スタッフの励みになっています。TAKANEさんはスタッフとの家族的な交流も大切にしていて「この春は、スタッフとお花見もしたい」と話します。

取材の最後には、出勤してきた避難民の女性も姿を見せました。「イチバンホシイ、セソウノオワリ」と日本語で話してくれた言葉に、ウクライナの苦難が、遠い世界ではなく、同じ世界で起きていることを実感しました。

祖国の味や家族の絆を大切にする気持ちは国が違っても同じ。この戦争が早く終わって、避難民の皆さんが祖国に帰ることができることを願うばかりです。スラバ・ウクライニー（ウクライナに栄光あれ）

編集後記

取材を終えて、言葉の壁を超え、交流するだけでなく、避難民を継続して支えられるシステムを築くにはどうしたら良いのかを考えています。また、何かしたいと思うだけではなく、実際にお店を開いたTAKANEさんの行動力に感銘を受けました。（田村）

今週の取材班

田村晴記者　（高1）
★企画者

岩瀬慧記者　（中3）
増沢留央記者　（小6）

＊「ヨミウリ・ジュニアプレス」は、読売新聞が運営する子ども記者団です。発足は1984年で、作文や面接で選ばれた首都圏の小5～高3約40人が活動しています。

J通信

6年間通った学校の卒業式が終わった。高校生活はコロナ禍で思い通りの活動ができず、悔しい思いをすることもあった◆高校生活を振り返る上で欠かせないのはやはりジュニア記者としての活動である。中でも、村上春樹さんの取材は忘れられない。自分の思いや忘れてほしくない出来事を小説で読者に伝えることへの情熱が感じられた体験だった◆様々な取材を通して、「伝える」ことの魅力に気づいた。新聞だけではなく、本や映画など、思いを伝えるものはどれも幅広く、奥が深い◆将来進む道を後悔しないために忘れたくない言葉がある。村上さんが取材で残した「『自由』であることを一番大切にしてきた」という言葉である。大学生になり、学びの選択肢が増える中で、私も自由に学び、思いを伝えられる人になりたい。（高3・吉川詩音記者）

伝えることの魅力

Jのお気に入り

＊恐怖映画ポスター

怖いもの見たさは、子供も同じ。もちろん、ホラー、怪談、SF、パニックといった映画のファンもいます。そんな映画好きにもってこいの展覧会「ポスターでみる映画史 恐怖映画の世界」が26日まで、東京・京橋の国立映画アーカイブ展示室で開かれています＝写真＝。「魔人ドラキュラ」「キング・コング」といった戦前の古典から、「サイコ」「ジョーズ」「エクソシスト」「ミッドサマー」までを網羅。「四谷怪談」「八つ墓村」「着信アリ」といった日本映画を含め、約120点のポスターを展示しています。

ポスターのデザインを見ているだけで、ソクソクしてきます。展示を見た小6の奥井晴記者が怖いと思ったのは「呪怨」です。「人の顔をアップにすることで、視線を感じるのが怖い。さらに、真横があない顔が、恐怖をあおっている」と感じたそうです。

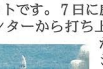
「怖いと感じるもの」の変化も分かります。奥井記者は「モンスターや校舎のから、徐々に心のホラーに変わってきている」と受けとめました。

ジュニアプラス

Jプラス

賢くなるパズル

3月2日

参議院で答弁する自民党の候補者の猪口和男

宇宙航空研究開発機構（JAXA）や三菱重工業が共同開発している日本の新たな主力ロケットです。7日に鹿児島県の種子島宇宙センターから打ち上げられましたが、第2段エンジンに着火せず